高尾山報 令和3年9月号 毎月1回発行 通巻第692号

高尾山報

夏寺の一会（いちえ）
萬燈（まんどう）ともさるる

令和3年9月号

法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(111)

リーンリーン
チンチロリン

九月に入って、朝晩にいくぶんかの涼しさが感じられるようになってきました。耳を澄ませば、松虫や鈴虫などの声も元気に聞こえてきます。

秋の夜の
月に心の
あくがれて
雲居にものを
思ふ頃かな
（『詞花集』花山院）

（秋の夜の月へと心が浮かれ出て、はるか雲の上で物思いをすることよ）

秋の草花や虫の音に包まれながら夜空を見上げれば、まどかな月が輝いているでしょうか。そのやわらかな光に誘われるように、いつしか心が身体から離れて、ふわふわ空へと舞い昇っていきます。

間もなく「中秋の名月」（十五夜）を迎えます。

中秋の名月は一年で最も麗しいとされる
（写真提供・髙岡輝幸氏）

今年の旧暦八月十五日は、九月二十一日。ちょうど秋のお彼岸の時期（九月二十日から二十六日）に当たります。一年で最も麗しいとされる満月を愛でながら、ご先祖様を偲んでみてはいかがでしょうか。

ちなみに俳諧の世界では、前日の十四日の夜の月を「待宵」と呼ぶそうです。「十五夜を待つ」という意味から名づけられたとか。満月（十五夜）翌日の「十六夜の月」とともに、月の姿の微妙な変化を感じ取るのも趣深いかもしれません。

遙か上空に目を転じれば、お彼岸の期間には、太陽の通り道である黄道と天の赤道とが一点に交わるそうです。太陽が赤道の北から南へ横切れば秋分、南から北へと抜ければ春分となり、この日を境に昼と夜の長さが長くなったり短くなったり、どちらかへと傾いていきます。

「黄道」「赤道」の他にも「白道」と呼ばれる道もあります。白道は、「月が天球上を動く道」。地上から天空を見渡せば、太陽や月、星々の道が、毎日ほんの少しずつ移動しています。こうした大いなる動きによって、私たちの日々の生活は成り立っているのでしょう。

「提灯を借りた恩は知れど、天道の恩は忘れる」という言い回しもありますが、収穫の秋を前にして、普段は忘れがちになっているお天道様、お月様の深い恵みを、あらためて噛みしめたいと思います。

仏教では、月のように澄みきった心を「心月」（訓読みして「心の月」）と称します。それは、迷いのない悟りの境地を表します。『心地観経』というお経の中に「月即是心、心即是月」（月は即ちこれ心、心は即ちこれ月）と見えるように、人間の心は、本来は明月のように清らかなものと説かれています。

ところが日常を振り返ってみると、つい過度に愚痴を吐いたり怒ったり、次から次へと欲望もわき上がってきて尽きることがありません。心を苦しめ悩ませる「煩悩」と呼ばれる雑念を、どのように減らしていったら良いのでしょう。

例えば、密教には「月輪観」という観法（瞑想法）があります。「月輪」とは「輪のように丸い月」を表し、「満月のように清浄な心」を意味します。月輪観の修行では、心の中に現れる月輪（月）を静かに観つめ、心の月にかかった煩悩の雲や霧を、少しずつ取り去っていきます。

平安時代を生きた成尋阿闍梨（一一一〇～一〇八一）という僧侶の母親は、八十歳を過ぎてから『成尋阿闍梨母集』という作品を書き綴りました。その中には、遠く異国の地へと修行の旅に出てしまった息子成尋を思って、一人月を眺める

場面が描かれています。

月がとても明るいのを見ていると、夜が更けて月が西に入るので、月輪観ということが思い出されて、しみじみとした気持ちになって歌を詠みました。

山の端に
出で入る月も
めぐりては
心のうちに
すむとこそ聞け

（山の端に出入りする月ではあるけれど、この世では人の心の中にあって、静かに澄んでいると聞くよ）

出で入ると
人目ばかりに
見ゆれども
こしの山には
のどかなりとか

（月は出たり入ったりしているように、人の目には見えるけれど、お釈迦様が『法華経』を説いたという霊鷲山には、いつも静かに照り輝いているというよ）

私はいつも、空に月を見たいと思っています。

（『成尋阿闍梨母集』）

成尋母は、移りゆく実際の月の姿を眺めながら、心の中にあるという澄み切った月を見つめています。さらには、西に沈む月に心を乗せて、遠く天竺（インド）に光り輝く満月を、心の眼で観じていたのでしょう。成尋母は、大空に照る月に仏様を感じ、その光によって悲しみが癒やされていったのではないかと想像されます。

光あるものは、
光あるものを
伴とす。
（『沙石集』）

（輝きある者は、輝きある者を友とする）

心の月を磨いたならば、夜空の月とも友達になれるのでしょうか。一つ一つ迷いの雲を吹き払って、年に一度の十五夜様にお会いできればと思います。

（栃木北部教区普濟寺）

信徒峰中修行会における月輪観

令和三年八月豪雨被災者の皆様に謹んで御見舞い申し上げます

九州地方や中国地方、長野県など、日本各地で発生した集中豪雨により甚大なる被害を受け、被災された多くの皆様に謹んでお見舞い申し上げ、災害によりお亡くなりになられた方々の御冥福を、心よりお祈り申し上げます。

そして、一刻も早い復興と、皆様に平穏なる日々が訪れますようご祈念申し上げます。

大本山　髙尾山薬王院

医療従事者へ届け 夕闇を照らす灯りの巡礼

八月二十一日、昨年に引き続き真夏の高尾山にて、「灯りの巡礼」が開催されました。

この灯りの巡礼では、参道の春日燈籠に灯りが点され、有喜苑では全国の医療従事者に感謝の念を届けるため、仏舎利塔を青く照らし出す「ブルーライトアップ」が行われました。

また、有喜苑の仏舎利塔には、全国の御信徒の皆様から御奉納頂きました、諸願成就の願いが込められた数多くの紙燈籠の淡い光が、暗闇を優しく照らしておりました。

夕暮れの有喜苑において、佐藤山主御導師のもと柴燈大護摩供が厳修され、全国の医療従事者の無事を祈ると共に、新型コロナウイルス感染症が終息するよう、参列者と共に祈りを捧げました。

奉納頂いた紙燈籠が並び
青く照らされる仏舎利塔

夕闇照らす春日灯籠

佐藤山主御導師のもと柴燈大護摩供が厳修された

高尾山子供やまぶし 修行体験会

八月一日（日）、高尾山子供やまぶし修行体験会が開催されました。昨年は新型コロナウイルス感染拡大予防の為に中止となりましたが、本年は募集人数を減らし、行程を見直して各種感染予防対策を行った上で実施致しました。

山麓の不動院で保護者達と別れ、山伏と共に琵琶滝水行道場を目指して出立。水行では滝に打たれながら、御本尊様とのお約束として山伏から問いかけられた、「お友達と仲良く出来ますか?」「好き嫌いせずにご飯を食べられますか?」という質問に元気よく、「はい!」と答えました。

その後猛暑の中、汗をかきながら時に険しい山道を練行して、薬王院に向かい、到着後には大本坊にてカレーライスの昼食を頂きました。

昼食後には腕輪念珠の製作。出来上がった念珠は大きさ、色使いが様々な、自分だけのオリジナル腕輪念珠となりました。その後大本堂にて、佐藤山主御導師のもと厳修された御護摩修行で、腕輪念珠をお加持して頂きました。

不動院での閉会式では、代表者がご本尊・飯縄大権現様へ、本日の修行の成果を今後の生活に生かすことを約束する「誓いの言葉」を奉告。最後には、修行を終えた証となる、「修了証」が授けられ、開会式の時はどこか互いによそよそしかった子供たちも、修行会を通じて仲良くなった友人と別れを惜しみながら帰宅しました。

元気に滝行を修す

佐藤御山主のお話を聞く

険しい山道の練行

観音菩薩の宗教 ㊺

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子（その8）

これまでの拙論において、聖徳太子の本地が観音菩薩であり、その権化として最初に天竺（インド）の勝鬘夫人に転生し、続いて震旦（中国）で六世に亙り転生したとされる信仰を見てきた。また、震旦においては厳しい修行を積んだ六人の市井の僧とされる説とともに、六番目は実在した南北朝時代の高僧である南岳慧思とする説のあることも述べた。天竺、震旦に次いで転生する地は、三国の大尾に位置する日本である。

すでに見てきたように、太子は自らの口で過去世において二国を経て日本に来臨したと述べている（「観音菩薩の宗教㊸」など）。以下の引用では、日本に転生したことを述べるのみならず、太子の出生の環境や親についても明示する。初めに原文、次いで筆者の現代語訳を掲げる。（）は補訳、原文のルビは原著の通りである。

「その、ち、震旦衡山におひて、六生の利益満足し、我朝日域にらいりんして、すなはち用明天皇の太子、推古女帝の儲の君として、一期五十ケ年のあひだ、三十三身の中には童男・優婆塞・小王身の三身を現じて、王法仏法ともにこれをおこし、まことに我朝の釈尊、日本まのあたりの仏なり」（『聖徳太子伝』巻一、杉本校訂本一七頁）

「（インドで観音菩薩の転生として勝鬘夫人となって生を享けた）そのの、ち、震旦の衡山で六度の生まれ変わりをするなかで仏の功徳が満願し、（そのお蔭で）日本に来臨した。日本では用明天皇の太子であり、推古女帝の跡継ぎ（皇太子）として生まれた。その五十年の生涯のあいだ、観音菩薩の三十三の権化のうち、少年、在家の仏教信者、人間界の王という三種の身体を現して、（世俗的な）王法、（宗教的な）仏法をともに実現した。（これよりすれば、太子は）まことに日本のお釈迦様であり、日本で（我々の）目の前においでになる仏様である」

これまでも見てきたように、類同の記述は『聖徳太子伝』やその原本に相当する『聖徳太子傳暦』の随所に見られるが、ここで言わんとすることは、観音菩薩以来、転生し続けたのち聖徳太子になったと明言することである。さらに上記の文章を敷延して、『聖徳太子伝』は次のように述べる。原文と拙訳を順に掲げる。

「をよそ、我朝のかいびやくをたづぬれば、天神七代、地神五代、神代十二代をくつて神武天皇をはじめとして、人皇三十二代のみかどは、聖徳太子の御ちゝ、用明天皇の御事なり。しかるに、生身の観音、むゑん済度の慈悲にもよほされて、かの蓮台九品のじやうどをたち出でて、このぞくさんへんどの日域にらいりんし、欽明天皇即位三十二歳次辛の卯年、春正月甲子、夜の夢中に、金色の僧のかたちを現じて、用明天皇を御父とし、間人の皇后を御母とさだめ、親子をんあいのちぎり、曠劫たしやうのしゆくえんを、いまのときにはたし給ふなり」（前掲書、十八頁）

「そもそも、我が王朝の（始まりである）開闢を尋ねると、天の神が七代、地の神が五代（で合わせて）神代の十二代を順に数えて、（初代天皇の）神武天皇を始めとして、人間の天皇である第三十二代の帝は、聖徳太子の父上である用明天皇のことである。ところで、（肉体を持って現れた）生身の観音菩薩は、無縁済度の慈悲に促されて、（極楽浄土の）蓮華の台を出立して、この小さな辺境の国である日本に来臨する（ことになった）。欽明天皇がご即位三十二年で崩御された後の卯年の春、甲子の年に、（母君の）夜の夢の中で金色の僧侶の姿で現れ、用明天皇をご尊父に、間人の皇后を母君として、親子の恩愛の契りと、無窮の時代の多くの生まれ変わりの宿縁を結んでこの世に（太子は）お生まれになった」

上記の引用にいくつか注記を加えて解説しよう。

神代とは神武天皇が即位する以前の神々が日本を治めていた時代のことを指す。これらの神々については『古事記』や『日本書紀』などで種々の伝承があるが、ここでは天神と地神の十二代を数えている。これらの神々により天と地の世界が開かれたことを天地開闢という。十二代目の伊邪那岐・伊邪那美の兄妹がこの世に降り立ち、その子のひとりである天照大神の子孫である神武天皇が即位して最初の天皇となる。その三十二代目を『太子伝』は聖徳太子の父である用明天皇と記しているが、実際には三十一代である。著者の誤りであろうか。その子として生まれたのが聖徳太子で、『太子伝』は観音菩薩の慈悲によりこの世に生を享けたと述べる。

ここで「むゑん」とあるのは、「むえん」の誤りである。「むゑん」であれば、「無援」となろうが、これでは意味をなさない。「むえん」は「無縁」であり、「無縁の慈（悲）」とすると、いずれにも差別をしない深い慈悲をいう。ここでは一切衆生を救う観音菩薩の慈悲を指している。蓮台九品とあるのは、通常、九品蓮台といい、極楽浄土の蓮華の台をいう。観音菩薩は深い慈悲から極楽を発ち、天竺や震旦での転生を経て粟散辺土の日本に来臨した。粟散辺土とは粟粒を散らしたような小さな島々の辺境の地の意で、仏教の祖国たる天竺や、師たる震旦に対して日本を謙った言い方である。

次に『太子伝』は太子の生まれを述べるが、上記の文では、欽明天皇三十二年（五七一）に誕生したように誤読しかねない。拙訳のようにいささか訳語を補って読むと、欽明天皇が五七一年に崩御した三年後の甲子の年（五七四）に生まれたと解釈できる。この生年は『日本書紀』など諸資料が一致して述べるところである。太子の母の夢に金色の僧が現れた後に妊娠したとする太子誕生前の奇瑞譚はすでに述べたので繰り返さない（「観音菩薩の宗教㊳」）。その次の文も上記拙訳で意味は通るであろうが、一言、贅言を費やす。引用の最後の文が説くのは、太子は長い時間の無数の転生で功徳を積み、尊い縁を結んで我が国にお生まれになったとすることである。

本書が伝記を標榜しているかぎり、太子の今生の事跡を叙述していることは言を俟たない。本書の元になった漢文の『聖徳太子傳暦』も同様であるが、基本的には太子の生涯を編年体で記している。ただ、『太子伝』が近代的な「伝記」と異なるのは、本人の誕生から死までの事跡で完結せず、過去世や未来世の事跡も述べることである。こうした叙述法はブッダの前世から書き出す『ジャータカ』を含んだ『仏伝』に淵源するもので、思想的には宿業とか輪廻転生説に基づいている（「観音菩薩の宗教㊳㊷」参照）。近代以前の仏教的伝記は、伝説と史伝、あるいは宗教と歴史が融合して記されている。篤い宗教心、深い敬意に裏付けられた伝記という点で、太子の伝記も『ジャータカ』も同様である。

さらに『太子伝』の重要な特色として、日本神話と仏教の結合、あるいは神道と仏教の習合が挙げられる。このことについては次号に述べることにしたい。

絹本着色聖徳太子勝鬘経講讃図・室町時代。守山市少林寺蔵。滋賀県立琵琶湖文化館寄託。守山市指定文化財。聖徳太子が中大兄皇子や小野妹子らに『勝鬘経』を講説しているとしている様子。（「観音菩薩の宗教㊸」参照）。法隆寺蔵の図（国宝）に倣う

いけばなの心⑲

華道教授　佐藤　宗明

九月に入り、秋の空気を感じる日が増えてきたように感じます。

九月と言うと五節句の一つ、重陽の節句を迎えます。陰陽思想では偶数が陰、奇数が陽の数となり、一番大きい陽の数が重なる日、という事で『重陽』と呼ばれます。また、『菊の節句』とも言われ、無病息災や寿命長久を願い、菊の花を飾ったり、菊酒を酌み交わしたりする風習があります。

菊の時期は新暦の九月ではまだ早く、旧暦の九月（新暦の十～十一月頃）になると例年、各地で菊まつりが開催されます。今回は、いけばな作品で菊を愛でて頂ければと思います。

この作品は寒菊を使った生花正風体です。花屋さんで一般的に見かける菊とは違い、茎が横になびくような姿をとっています。その動きを生かして満月を模した「月」の花器を使い生けてみました。

花器の上に鎖が見えることからもわかると思いますが、天井から釣って飾る花器です。もちろん作品の主役は植物ではありますが、花器もそれを引き立てて秋らしい風情を感じさせてくれています。

生花正風体には決まった役枝、型がありますが、元々、植物の良さを引き立てるために生まれてきたものです。使用する花材によって、このように花器を釣ったり、横に伸びていったりと、様々な変化をして花材を引き立て、見る人を楽しませてくれます。

花材：寒菊

得度式厳修

七月三十日、早朝の高尾山大本堂に於いて、佐藤御山主戒師のもと、新たに仏門に入り僧侶となるための得度式が執り行われました。

得度者は、佐藤秀仁御山主法資・大久保秀佳さん（十八歳）と、八王子市萬福寺住職・南清晋介法資・南清晋玄さん（九歳）です。新たに仏門に入られた新発意の、今後の様々な修行での精進を願うものであります。

佐藤御山主と記念撮影する新発意の二名

法縁感謝

猫足卓を御奉納頂く

去る七月二十七日、成田山の僧侶育成機関の成田山勧学院卒業生により組織される成田山勧学七誓会（宮内豊俊会長）より、佐藤御山主へ猫足卓を御恵贈賜りました。御山主は成田山勧学院で一年間僧侶としての礎を学び、その法縁から昨年十二月に高尾山中興第三十三世に就任された記念として、七誓会を代表し四名がお祝いのため御来山されました。

御一行は高尾山の書院にて御山主と親しく挨拶を交わされ、猫足卓を手渡された後、山主と共に思い出を語らいながら、しばし同窓のひと時を過ごされました。

猫足卓には、御山主と共に全国各地の霊山を巡った愛用の法螺貝と頭襟が飾られております。

成田山勧学七誓会の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

御山主と成田山七誓会の皆様

猫足卓に飾られる法螺貝と頭襟

第五十四回 飯綱火まつり

八月十日　於・信州飯綱山麓

去る八月十日、信州飯綱山麓・大座法師池周辺にて、佐藤山主御導師の下、飯綱火まつりが執り行われました。

飯綱山頂から運ばれる御神火が柴燈護摩壇に点火され、新型コロナウイルス感染症終息・家内安全、五穀豊穣、無病息災などの願いが、参列者一同と共に、お山への感謝を込めて祈願されました。

新型コロナウィルス感染症の終息など諸願成就を祈念する
（写真提供：飯綱高原観光協会）

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる 21

明治大学博物館　外山　徹

十二世堯永1　所持地と延宝火災

一二世祐清の遷化は明暦元年（一六五五）十月一五日のこととされているが、これは長谷寺小池坊良誉から印信を授かってからわずか二年後のことである。祐清以前の歴代山主の享年は不明だが、長谷寺に修学後間もなくの遷化は予期せざるものであったかもしれない。

仁王門の奥に護摩、薬師、大日の三棟が並ぶ（江戸末期）
『八王子名勝志』（国立国会図書館蔵）から

二二世堯永

祐清の跡を承けて山主となった堯永は、過去帳にある享年から逆算するとその時三三歳。当時としては早すぎるとも言えないが、若き山主の誕生であった。一〇世堯秀と通字を同じくすることから、師弟ないし近い系譜にあったことが推測される。

堯永の事績として天保四年（一八三三）の由緒書が記すものに、寛文五年（一六六五）、将軍家綱からの寺領朱印状拝領がある。前の年には諸国の大名に対し、この年は寺社に対して朱印状が発給されている。

このタイミングで統一的な領知手続き（所領安堵）がおこなわれた理由として、江戸幕府による支配体制の安定が指摘されている。家綱が将軍となった一四年前には、軍学家由井正雪を首謀者とする幕府転覆の陰謀事件が発覚するなど政情に不安があり、背景には幕初以来の有力大名改易にともなう浪人の大量発生があった。家綱政権期には諸大名に対する厳しい抑圧が緩和され、体制の安定がもたらされたその帰結であった。以降、領知は将軍個人との関係に発するものとして、代替わりの度に、朱印状が再交付されることになる。

さて、薬王院の寺領七五石は租税徴収権を将軍から委ねられた経済基盤であったが、朱印高は薬王院が志向する半分に止まったことを以前に記した。実際、薬王院の所持地の状況はどうだったのか？　堯永の時代、寛文期にはそれが明らかになってくる。

薬王院の所持地

それ以前において、すでに寛永（一六二四～四四）の頃から近隣の村々との間で山林の伐採をめぐるいざこざが発生していたのだが、それには薬王院領と村持ちの土地との境界が明瞭でなかったことが背景にあったようだ。

例えば、高尾山麓にある大宮（現在の氷川神社）は薬王院の兼帯社であったが、寛文六年（一六六六）十一月、幕府代官による上椚田村の検地を契機にその所領形態に変更が加えられた。関連の書面によると、その間の事情を、

社領散り散りにござそうら得ば、以来、いかがにそうろう故（中略）**大宮近所に片付け、**

と説明している。つまり、社領が細切れに分散していたのでは便が悪いので、村人と土地を交換して境内の近くに集約したということである。

そして検地の結果、翌年付で薬王院所持地に係る検地帳が作成されている。代官支配地から分離された薬王院領を代官が検地する筋合いはないのだが、表紙には「上長房村・上椚田村御年貢地御水帳写」と記されている。つまり、この検地帳に記された土地は、朱印地としての寺領ではなく、

両村の代官支配地に薬王院が所持している土地なのだ。

それによると、土地の位置として「ひかけ沢あま芝道西」「ゆく沢出口」「あらいむかい」と、日影、天柴、荒井、行沢など現在の裏高尾町方面の地名が見られ、これら上長房村分合計で畑三町八反五畝一〇歩、田二反七畝一四歩。上椚田村字沢子（氷川神社の北側辺り）に畑四畝二四歩、田三反二畝四歩があり、合わせて四町四反九畝二二歩（約四万五千平米）の耕地を所持していたことになる。それらの田畑は両村の村人が耕作し、収穫の内から代官所へ年貢を納め、いくばくかを小作料として上納していたのだろう。同帳の奥書によると薬王院の所持地に村人が田畑を開発したとのことである。

この後、江戸中期以降には、村人が薬王院に対し田畑を質入れする証文も残り、質流れとなった土地が小作地として集積されてゆく動向も推測される。こうした、朱印地・除地として郷帳類に明示される以外の、年貢地において寺社に付属する土地は存外に多い。これは各村々の寺社にも言えることで、そうした土地からの収益が堂宇の営繕や本寺へ上納する報謝金などの必要経費に充てられ、寺社の維持に係わる出費は檀家や氏子の負担に負うばかりではなかったのである。

仁王門
延宝火災の後も度重なる台風の被害を受けた

延宝の火災

仁王門の仁王像の胎内から発見された銘札には、延宝五年（一六七七）十一月晦日に火災があり、薬師堂が焼失したことが記されている。このことは、貞享三年（一六八六）付の文書にある「延宝五巳年薬師堂炎上」という文言にも裏付けられる。先の銘札は仁王像の再興を貞享元年（一六八四）としているので、仁王門も同時に被災したことがわかる。

当時の伽藍の様子については推測の域を出ないが、寛永古鐘の鋳造が史実として確実なので、同時に鐘楼が建てられたであろう。寛文元年六月の記事に「申の年の大風に飯縄宮・薬師堂、そのほか末社ならびに寺破損つかまつり」とあり、直近の申年は明暦二年（一六五六）だが、薬師堂以外にも、「寺」ということなので、仏堂が存在したことになる。

管見のところ、延宝より後に火災の記録はなく、後年、薬師堂の左右に在った二つの堂、つまり、奥之院不動堂（当時は護摩堂）は建築様式から寛永年間（一六二四～一六四四）の建立を推定され、大師堂（当時は大日堂）は江戸中期以降の修築が入りつつも部分的に古様式を留めることからすると、想像レベルの話だが、護摩堂は焼失をまぬかれ、大日堂は部分的に類焼したということかもしれない。両堂が被災後もそのままの位置に在り続けたとすれば、江戸後期に見られる伽藍配置（挿絵）は、すでにこの頃には存在したのではないかと推測される。仁王像の再興は被災から七年後。薬師堂は祭祀の中心であるので、それ以前に再建されたことだろう。仁王像と同時期に仁王門の再興も成ったと考えられる。

延宝八年（一六八〇）、四代将軍家綱が薨去。天保の由緒書によると、堯永は納経・拝礼を勤めている。家綱の廟所の所在からすると、上野寛永寺であっただろうか。

家綱には子がなかったことから、五代将軍には弟の館林（群馬県）藩主綱吉が就任した。堯永は翌々天和二年（一六八二）、綱吉将軍就任にともなう代替御礼に参列、江戸城帝鑑間にて御札を献上し、衣服を下賜されたという。次いで、寺領朱印状を拝領する貞享二年（一六八五）には、伽藍の修築が成っていたことになる。

《参考文献》小町和義「高尾山の建築について」（『多摩文化第二四号武州高尾山その自然と歴史』一九七四）、『東京都の文化財1建造物・史跡』（東京都教育委員会、一九九二）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

恩師・菊地正先生に学ぶ
創作書おろし

石神さまと細石

とんとん健康散歩の会
石井忠明

とんとん昔なぁ、八王子横山の高尾の山裾にある鎮守の野原でなぁ、女子等が夕焼け小焼けの歌を唄いながら、花摘みをしていたんだと。

するとなぁ、そこえよぉ、悪餓鬼の小僧等がよぉ、近所で一番の悪を先頭になぁ「どけ！どけ！」といってなぁ、女子等を蹴散らしたと。

悪餓鬼の親玉がなぁ「おい！みんな！‥蹴っ飛ばす石塊を集めろ！集めたら、直ぐにやんべぇ」。

石塊は直ぐに集められたぁと、そんでもってなぁ親玉がなぁ、「お前からやれ！次はお前だ！」と石は次から次へ蹴っ飛ばされていったと。

飛ばされた石はなぁ、日頃、人間様に踏み付けられている石だったんだけんど、どおゆう訳かなぁ、みんなみんな草花が咲いている方に飛んで行ったと。

そんでもってなぁ、いよいよ最後に親玉の番が来たぁと、親玉はなぁ、止せばいいのに皆より二回り以上もある、大けぇ石を蹴っ飛ばしたぁと。

そしたらよぉ、親指の爪が剥がれちまってなぁ、「痛ててて！」と泣きながら家へ帰っちまったぁと。

蹴っ飛ばした石といえばよぉ、草花が咲き乱れる方へ行かねえでよぉ、反対側の坂道をコロコロ転がってなぁ、汚れた水溜りにドボンと落ちたぁと。石は真っ黒けぇに汚れてしまっていたと。

日が暮れるとなぁ、女子等も家に帰り、悪餓鬼共も三三五五(散々午後)家に帰っていったと。

陽は西へ、とっぷり傾き、鎮守様の周りは静かな森に戻ってなぁ、松虫だけがチンチロリーンと鳴いているだけだったと。

ところがよぉ、どこからともなく品の良い婆々様が現れてなぁ、蹴られたり、汚れたりした石を拾い、近くの清水のところで洗っているではねえかよ。

そんでもってなぁ、その石に筆で何やら書き終えると、鎮守様の祠の前へ安置すると何処かへ消えてしまったと。

明くる日、何時ものように鎮守様の境内で餓鬼共が遊んでいると、餓鬼等が蹴った石に似たような石が祠に置いてあるのに気が付いたと。

「おおーい、皆来いよぉ、ほれ見ろよ、昨日、己等が蹴っ飛ばした石が綺麗になって置いてあるぞ、誰がやったんべぇか、何か字が書いてあるぞ。

餓鬼共が不思議がって見ていると、又何処からともなく品の良い婆々様が現れて、餓鬼共に話しかけたぁと。

「お前さん達、昨日石塊を蹴っ飛ばして遊んでいたね、遊ぶのは良いけど、石塊が可哀相だよ、みんなみんな石が泣いていたよ、だから綺麗に洗って置いたのさ」

そぉ言うと、またまた何処かへ消えていったと。

婆々様の話を聞いていた餓鬼共はなぁ、何時しか目から涙をポロポロと流していたと。

すると悪餓鬼の親玉も目に涙をいっぱい浮かべながら「お前達俺に付いてこい！」と云ってなぁ、何やら字が書かれた小石を、鎮守の森にある大きな桜の木の根元に並べてなぁ、みんなで手を合わせて拝んでいたと。

それからの悪餓鬼共はというとなぁ、毎朝畦道に転がっている石塊を丁寧に脇に置き、みんなが安心して歩けるようにしたぁと。

そぉしてなぁ、暫く経ってから餓鬼の親玉はなぁ、自分の家の祖父祖母に今までの不思議な出来事を話したぁと。するとなぁ、祖父祖母は揃ってなぁ、「それはなぁ、石神様じゃよ、小さな石塊でも大事にしなければいけないよ、という訓えから石神様が現れたんじゃよ」と云ったとさぁ。

ところでなぁ！この「昔ばなし」はなぁ、八王子の公園で一番古い冨士森公園をぶらりと散歩をしてごらん。するとなぁ、今でも桜の木の腐った枝の穴や木の根元になぁ、何やら筆で書かれた石塊が今でも安置されているとさ。

とんとん昔はへぇしまい。

桜の木の大穴に安置された石塊
「なむ」と書かれている

富士森公園脇の浅間神社

いろは天狗の落し文 ⑧

ちょっとの譲歩 心得あれば 善き関係が保たれる

「譲歩」、一面では自分の考えの一部や全部を変えて、相手の考えに従うという意味があります。しかし、見方を変えると、相手の意見を尊重しているとも言えるでしょう。

ここで大事なことは、お互いに譲歩することができれば、互いが穏やかに納得し、妥協できる一致点を見いだすことが出来ることです。

自分の意見だけを押し通す事は難しいもので、友好的な人間関係を築くためにも、相手の考えを理解して受け入れることが必要不可欠です。

厄年を過ぎた御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・二年を
七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを
八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を
九十才を過ぎたなら
一日・一日を
気を付けられ
日々を大切に
圓満にお暮し下さい

当山では皆様の
(身体健全 寿命長久)を祈念して
福壽圓満の
御護摩を
お申し受け致しております。

院内散歩 55

～薬王院の展示物～

彫刻「飯縄大権現」

作・西嶋豊志

高尾山季節散歩

暦の言葉　「七十二候」

雷乃収声
「かみなりすなわち こえをおさむ」

九月二十二日～九月二十七日頃

この言葉は、雷が鳴り響かなくなる、ということを意味します。

夏の間は雷を呼ぶ入道雲が空高くそびえますが、この時期には姿を消し、うろこ雲が現れてきます。

そうするともう晩秋となり、穏やかな気候がやって来ます。

今月の風物詩

里芋

八月から九月にかけて旬を迎える。里芋はイモ類の中では低カロリーで知られ、独特のぬめりがあります。このぬめりには、様々な栄養素が含まれております。

日本では縄文時代から食用とされ、親芋から子芋、孫芋と、どんどん増えることから、子孫繁栄の縁起物とされてきました。

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「ゆったり登山」

八王子市　栃谷玲子 様

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

百四段　道理をわきまえること

道理とは、善悪の判断がつき、物事の筋道が正しい状態のことです。道理を理解するためにも、悪い原因をつくれば悪い結果を招き、善い原因をつくれば善い結果が得られる、この関係性を理解することが肝要です。

◎健康登山の皆様へ 高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの、心温まるお話を聞かせて、頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。

『高尾山健康登山の証』のお紛め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

折り折りの記 (145)

戦時中空襲警報の恐怖かな

波多野　重雄

昭和二十年八月二日未明、アメリカ軍の八王子空襲に依り、当時の八王子市区域は全滅に近い焼け野原と化す。(我が隼戦闘機の高度は七千粁が限界の一方、B29は二万粁。)

予告ビラ通り、B29の夜間焼夷弾攻撃に市街地は火の海と化し、市の約半分、九十九万坪を焼失。又P51の銃撃戦が八木町、散田町方面に追い討ちがあり、三日は、八日町附近、四日は、子安町へ四機襲来、機銃掃射。五日は、湯ノ花トンネルの列車襲撃。死者四十九名、負傷者多数。七日も、B29一機が市内に爆弾投下。

八王子空襲の被害は死者四千二十九名。被災人口七万九千四百三十人。焼失戸数一万四千三百八十五戸。高尾山にも焼夷弾落下。高尾山僧侶の消防団の鳶、纏を駆使し消火した。

(参)八王子市戦災記録
(高尾山健康登山の会会長)

十八本山参籠(3)

秋参籠
大本山大覚寺

京都嵐山大覚寺
逍遥院内思往事
大澤池面映明月
賞月雲際致微醉

厚木市　荒井　一雄

子規忌にぞ
生を承けたる
王維かな

秋、大本山大覚寺に参籠る

永六輔氏曰く、
『京都嵐山大覚寺…』
逍遥(さまよひ歩く)境内、
往事を思ふ…
大沢の池面に映る十五夜名月…
名月を雲の際に観、
しばし酔ふかも…

健康登山者投稿

最高齢ライダーへ

八王子市　齋藤　正之

私は長年の大型オートバイ愛好者です。最高齢ライダーの九十歳越えに挑戦しようと、体力維持のために卒寿(九十歳)を目指し、高尾山の健康登山を思いつきました。

二年前の七月から週一回登山をするようになり、もう九十回を越えるようになりました。下りは膝への負担が大きいので、残念ながらケーブルカーを利用しています。

この頃は杖を使うようになりました。最初の頃こそ、満足な二本足があるのに杖とは…と思っておりましたが、両手に持ってしっかりと押すと、上体は延び、歩幅は広くなって腕力も付くので、足と一緒に一石二鳥の効果です。

愛車は四百キロ超えの重さがあるので、動かすバランスのコツがわかっていても、基礎体力が必要です。

体力維持のためと頑張って登っていますが、この頃はお山の霊気が伝わってくるのか、帰宅すると疲れよりも、すっきりとした気持ちになります。

健康登山を続けているお陰か、体力維持というよりも、以前より体力がついてきたようです。

目指せ最高齢ライダー、後九年二か月だ。
頑張るぞおぉ！
オオ高尾山健康登山！

健康登山者が行き交う参道

おはなし散歩道

肩たたき

八王子市　木村　研

明日は、敬老の日です。ももちゃんは、お父さんの車で、高尾山の麓にあるおじいちゃんの家にいきました。

助手席にお母さんが乗って、ももちゃんはお姉ちゃんといっしょに狭い後部座席に乗りました。

車は、何度か休みながら、昼すぎにやっと着きました。

車が庭に入ると、

「いらっしゃい」

日当たりのいい縁側から、おばあちゃんの顔がのぞきました。

おばあちゃんは、日に当たって大きくふくらんだ布団を廊下に積み上げていました。

「暑かったろう。さあ、上がれ上がれ」

おばあちゃんに声をかけられて、ももちゃんが縁側にすわると、おじいちゃんが、籠をかかえて帰ってきました。

籠の中には、かぼちゃやなすが、たくさん入っています。

「わあー。お野菜だ」

ももちゃんが目を丸くすると、

「お前たちが来たらに食べさせてやるんだって、おじいちゃんがいっしょうけんめい育てた野菜なんだよ」

と、おばあちゃんが言いました。

「ほんとだ。大きい」

お姉ちゃんが、大きなかぼちゃを持ち上げていると、

「どうだ。重いだろう」

と、おじいちゃんが、肩をとんとんと叩きながらいいました。

すると、お父さんが、

「気がつかなくて」

と、あわてておじいちゃんの背中に回って、おじいちゃんの肩をとんとんとんと叩きました。

「あー、いい気持ちだ」

おじいちゃんが、うれしそうに言いました。

「まあまあ、いいですね」

おばあちゃんが、冷たい麦茶をはこんできて、

「お父さんだって運転で疲れたんでしょう」

と、お父さんの背中に回って、お父さんの肩をとんとんとんと叩きました。

「気持ちいい」

お父さんも、うれしそうにいいました。

そのときです。

お母さんが皮をむいた梨を持ってきて、

「おばあちゃんに叩いてもらって、いいわね」

といって、おばあちゃんの肩をとんとんとんと叩きはじめました。

「あー、いい気持ちだ」

おばあちゃんが、うっとりした顔でいいます。

だから、お姉ちゃんもお母さんの肩をとんとんとんと叩きました。

「ありがとう。とってもいい気持ちよ」

と、お母さんが言いました。

おじいちゃんの肩をお父さんが叩いて、お父さんの肩をおばあちゃんが叩いて、そのおばあちゃんの肩をお母さんが叩いて、そのお母さんの肩をお姉ちゃんが叩いています。

だから、ももちゃんも、おおいそぎでお姉ちゃんの肩を叩きます。

お姉ちゃんは、ちょっと肩が痛かったみたいだけど、

「ああ、いい気持ち」

と、いいました。

でも、ももちゃんの後ろには、もう誰もいません。日当たりのいい廊下でネコのたまが寝ているだけです。

だから、ももちゃんは、

「たまも、とんとんとんしなさい」

と、言いました。

それなのに、たまはなんにも言わないで、ぷいとどこかに行ってしまいました。

（挿し絵・小出　茂）

高尾山物語 41

ミシュラン三ツ星

絵・橋本豊治

大杉原の入り口には、「心のふるさと　祈りのお山　世界に冠たる高尾の自然」と書かれた石碑があります。

この石碑は平成十九年（二〇〇七）に、高尾山がミシュラン・グリーンガイド・ジャポンにおいて、山としては富士山と並び、三ツ星として掲載されたことを記念して、高尾の自然を後世に残すために建立されました。

高尾山が三ツ星に選ばれた理由は、東京都内に位置しながらも、自然が豊かで、都心からの交通の便が良いことが評価されたと言われています。

高尾山は暖温帯と冷温帯の境界に位置し、植物相が重なり合うことで、多様な生態系を形成しております。植物は約千六百種でイギリス一国に相当し、昆虫は五千種程度生息しており日本屈指です。

高尾山の自然をこれからも守っていくためにも、ゴミの持ち帰り運動に御協力願います。

ゴミの持ち帰り運動

昭和四十年代、高尾山にはゴミが散乱しておりました。しかし、地元有志によるゴミ拾い、登山者にはゴミ箱を撤去して「思い出とゴミは持ち帰りましょう。」とお願いし、現在の綺麗なお山になりました。

高尾山修行場めぐり 6

六根清浄石車

四天王門を潜ってすぐの右側には、「眼・耳・鼻・舌・身・意」という文字が六面に一文字ずつ書かれた石を回す、「六根清浄石車」があります。

六根とは、物事を見つめる「眼」、音を聴く「耳」、匂いを嗅ぐ「鼻」、味覚を味わう「舌」・感触を感じる「身」という人間の感覚器官、すなわち五感、そして五感から得られた大切な情報を正しく判断する「意（心）」を加えた、六つの感覚のことです。

人間は日々の生活を続けていくと、次第に六根が曇り、汚れてしまいます。六根清浄とは、汚れてしまった六根が清らかになるよう、高尾山に宿る神仏にお祈りすることです。

四天王門脇の大石車以外に、参道や境内の二十五カ所に小石車があります。御参拝の際に石車を見つけられましたら、「懺悔懺悔六根清浄」と御唱えしながらお回しいただき、自らの心を見つめ直し、身も心も一新した新たな気持ちで、人生を過ごしてみましょう。

第百十八回　高尾山信徒峰中修行会　十月九日(土)

【高尾山信徒峰中修行会】を、新型コロナウイルス感染症対策を考慮し、来たる十月九日に日帰りの行程にて開催致します。

高尾山に広がる大自然を修行道場として、高尾山御本尊・飯縄大権現様に身をまかせ、古来より伝承される修行を実践し、激動の現代社会に生きるご自身の心の波を静めてみませんか？

修行会では感染症対策として、マスクの着用、検温の実施、室内の換気、アルコール消毒、内外問わず身体的距離（ソーシャルディスタンス）の確保、食事の際の黙食等の対策を講じて執り行います。参加の皆様にもご協力頂きます事お含み置き頂きお申込み下さい。

・ハガキに必要事項（**郵便番号・住所・氏名・名前のふりがな・年齢・性別・生年月日・電話番号**）を明記してお送りください。

・お電話でのお申し込みは承りかねます。

・ご不明な点や、ご相談のある方は時間内（九時～十六時迄）に秀峰会事務局までご連絡下さい。

※今後の新型コロナウイルスの感染状況により、行程の変更、中止となる場合がありますので、あらかじめご承知願います。

行　程

7:00	高尾山麓不動院 集合・受付
7:30	開会式
8:00	回峰行
8:30	両滝道場到着
9:00	滝修行
	女性：琵琶滝水行道場
	男性：蛇滝水行道場
9:45	両滝道場出立
10:45	男女合流
11:30	薬王院到着
11:40	昼食
12:30	写経
14:00	御護摩修行
14:30	山麓へ出立
15:30	柴燈大護摩供
16:30	閉会式
17:00	解散

宛先　〒一九三―八六八六　八王子市高尾町二二七七　信徒峰中修行係宛

電話　〇四二―六六一―二二五

募集期間　九月十五日から九月三十日まで

参加費　一万円　＊保険料含

定員　男性　二十名　女性　二十名

定員となり次第締め切ります。ホームページでご確認下さい。

集合場所　高尾山麓不動院　午前七時集合

服装　運動着　運動靴（登山靴可）

持参品　雨具（カッパ、ポンチョ）マスク（三枚）、タオル、リュックサック　筆記用具

＊お持ちの方は、念珠、錫杖をご持参下さい。

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中（山上十一丁目茶屋前第十七番札所）で合流し、いっしょに巡拝致します。

A、不動院から蛇滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルカーを利用する。

（蛇滝周辺のお大師様は巡拝できません。）

※ケーブルカーを利用する場合、代金は自己負担になります。

日程　十月十二日（火）

行程　山麓不動院→蛇滝→仏舎利塔→本堂（護摩修行）→坊入（昼食）→下山（一号路）→不動院着（献灯式）→解散

参加費　五千円（昼食代、保険料含む）

集合場所　山麓不動院（八時集合）

申込方法　ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

締め切り　十月四日（月）

〒一九三―八六八六　八王子市高尾町二二七七　大本山高尾山薬王院　八十八大師巡拝係

＊申し込み締切り後、請け書（行程表・持ち物等）をお送り致します。

＊尚、新型コロナウイルス感染症の状況により行程の変更や中止となる場合があります。

御護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

郵送御護摩の申し込み

当山では、御護摩修行に参加できない方々のために、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙やFAXでのお申込みをお願いしておりますが、高尾山薬王院の公式ホームページからもお申込み頂けますので、是非ご利用頂きますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先

TEL〇四二―六六一―一一一五

Fax〇四二―六六四―一一九九

「郵送御護摩係」まで

杉苗奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納するという習慣がありました。

今日でも、お杉苗奉納は続いており参道の大杉原には、お杉苗奉納をされた方々の芳名板が、板塀のように並んでおります。

毎年**十二月十日**までに、一万円以上を御奉納頂いた方のお名前を、翌年一年間掲示させて頂きます。

七五三身上安全祈願

「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様にと、身上安全の願いを込めて寺社にお参りするという行事です。

高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月～十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈祷」を受け付けております。

どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

新型コロナウイルスに対する安全対策

高尾山薬王院では、新型コロナウイルスの感染予防を図る為、受付や御札授与所における飛沫感染防止ビニールガードの設置、境内各所への消毒液設置、また職員のマスク着用などの対策を実施しております。

御来山の皆様方にはお手数をお掛けしますが、当日ご自宅を出る前に検温して頂き、体調が優れない時や、不安な時は御来山をお控え下さいますようお願い申し上げます。

尚、最新の情報や行事の実施等につきましては、薬王院のホームページをご覧頂くか、お電話にてお問い合わせください。

登山だより

■十月行事日程■

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

十二日、二十四日
弁天様御縁日

四日
中興俊源大徳忌

五日、二十五日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

十七日
高尾山秋季大祭

二十三日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

二十八日
奥之院開扉供養（十時奥之院）

三十一日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

○御本尊様の日々の御加護に感謝し、百味のご供物を捧げて供養する法要です。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。

尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間

（4月15日～10月31日まで）

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山の昆虫

コバネカミキリ

143

高尾山には表参道以外に、幾つかの自然研究路があり、多少傾斜がキツイ箇所もありますが、より自然に触れ合うことができます。

研究路を山頂に向かって登って行くと薄暮になっていて、道の傍らにやや古目の材が積まれていたので目を向けると、素早く動く回るカミキリらしい甲虫を見つけました。

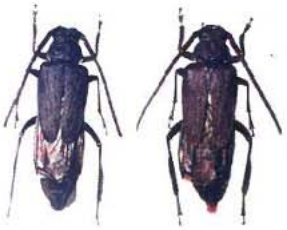
大きさからノコギリカミキリかと思いましたら、上翅が短くて後翅を格納できない形状から、コバネカミキリであることを確信し、これが本種との最初の出会いです。

多様性に富むカミキリの中には、コバネの形状を持つグループは他にもいて、アシナガバチに擬態したと思われるホソコバネカミキリの仲間、羽蟻のようなヒゲナガコバネカミキリの仲間等が知られ、それらに比べるとコバネカミキリは、地味で原始的な雰囲気を醸し出しています。

外見からしても昼行性ではなく、夜行性の種と思い浮かべましたが、灯火回りをした際に見かけた試しがなく不思議に思っていたところ、薄暮に活発に活動する本種に再会しました。

やはり黄昏時が好きなカミキリであることを、改めて実感した次第です。

（撮影・文　松島　孝）



高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

練馬区　鈴木　雅一
東村山市　福島　光子
八王子市　小池　まり子
小平市　関　道雄
八王子市　山本　千枝子
吉川市　飯島　和子
伊丹市　岩本　敏文
熱海市　桑名　智善
八王子市　石井　忠明
比企郡　戸口　朋幸
富里市　森　照森
新座市　彰山　粧麗
八王子市　天野　章雄
高尾山健康登山者一同

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円